

# 吹奏楽指導における効果的な音程の合わせ方を考察する ～ オクターブ・ユニゾンに特化したスコアリーディング ～

香川県立坂出高等学校  
教諭 田所 博

## 1 はじめに

吹奏楽という音楽形態は十数種類の管弦打楽器を擁しており、たとえ音楽大学等で研鑽を積んできた専門家であったとしても、30段を超える五線譜から成る総譜（スコア）から、全ての音を頭で管理し指導することは容易ではない。また昨今、音楽を専門としない教員や吹奏楽を経験したことのない教員が吹奏楽部の指導を任せられることもあり、生徒数の減少や片寄りのある楽器編成等、現場での指導は困難を極めている。

これまで「総譜（スコア）の読み方」「合奏における音程の合わせ方」について、多くの指導者から相談を受けてきたことから、ここでは、「吹奏楽の総譜（スコア）を読みやすくしたい」「音程を良くして合奏のサウンドを向上させたい」等、吹奏楽に携わる指導者誰もが抱える問題に少しでも役立つような指導のポイントを具体的に報告したい。その指導により児童生徒が吹奏楽の諸活動を通して、合奏の面白さや感動体験を共有してもらえたら幸いである。

## 2 実践の内容・方法

### (1) 移調楽器の読み替え方について

吹奏楽の合奏は様々な移調楽器により構成されている為、楽譜を実音で把握することそのものが困難である。そこで、総譜（スコア）を読む前に、まず各移調楽器の実音への読み替えを把握しておく必要がある。以下はあくまで筆者なりの読み替え方法ではあるが、このように移調楽器を「度数」で整理すると記憶し易いので紹介する。

#### 実音グループ

- ・ Flute、Oboe、Fagotto、Trombone、Euphonium、Tuba→表記音をそのまま読む
- ・ Contrabass→表記音より1オクターブ下を読む
- ・ Piccolo→表記音より1オクターブ上を読む

#### 2度グループ

- ・ B♭ Clarinet、Trumpet、Soprano Sax→表記音より長2度下を読む
- ・ Bass Clarinet、Tenor Sax→表記音より1オクターブと長2度下を読む

#### 3度グループ

- ・ E♭ Clarinet→表記音より短3度上を読む

#### 5度グループ

- ・ Horn→表記音より完全5度下を読む

## 6度グループ

- ・ Alto Sax、Alto Clarinet→表記音より長6度下を読む
- ・ Bariton Sax、Contra-alto Clarinet→表記音より1オクターブと長6度下を読む

<移調楽器を実音に読み替える際の注意点>

### ① Alto Sax を「へ音記号読み」は誤り

「Alto Sax の譜面をへ音記号読みして実音を読む」という方法を耳にするが、これでは音域に1オクターブのズレが生じるため、Alto Sax の実音と音域を正しく理解するためには、上記のとおり『表記音より長6度下を読む』のが適切と言える（Alto Clarinet も同様である）。

#### Alto Sax in E $\flat$



#### 実音（へ音記号読み）



#### 実音（長6度下読み）



一方で、「へ音記号読み」の読み替えを可能とするのは Bariton Sax の譜面である。

Bariton Sax の譜面のト音記号をへ音記号に替え、調号を3つ変化させれば、へ音記号の譜面をそのまま実音として読むことができる（Contra-alto Clarinet も同様である）。

#### Bariton Sax in E $\flat$



#### 実音（へ音記号読み）



### ② Bass Clarinet と Tenor Sax の共通点について

あまり注目されないのが、Bass Clarinet と Tenor Sax の読み替え方が同一であることである（1オクターブと長2度）。Bass Clarinet は低音域、Tenor Sax は中音域というイメージが強いからか、この2つの楽器が同じ度数の移調楽器であるという認識はあまり浸透していない。これらの楽器を所有している学校は多いので、読み替え方が一致していることをおさえておきたい。

#### Bass Clarinet in B $\flat$



#### 実音（1オクターブと長2度下読み）



#### Tenor Sax in B $\flat$



(2) オクターブ・ユニゾンの整理について

譜例1は、大きく分けると「旋律と伴奏」という二つの声部で成り立っていることが分かる（Bass Clarinet、Baritone Sax、Tubaは2分音符で進行しているため同じグループであることは一目瞭然である）。では一方で、メロディを担当している楽器群はどうだろうか。この旋律はユニゾンで記譜されているが、先述の読み替え方法を踏まえると、正しくは「3オクターブ」のユニゾンであることに気付く。つまり、譜例1の旋律群は、譜例2のように整理できるのである。合奏練習の際には、譜例1のように、ユニゾンであってもユニゾンを全員同時に演奏させるのではなく、譜例2のように各音域に分割して練習させると、生徒達は音程を合わせやすく、旋律の一体感を掴みやすくなる。指導者は、総譜に蛍光ペンで音域別に色分けして示すと指導し易い（ここでは、第1オクターブを緑、第2オクターブを黄、第3オクターブを赤の蛍光ペンで示すこととする）。

譜例1

The image shows a musical score for ten instruments: Flute, Oboe, Clarinet in B $\flat$ , Bass Clarinet, Alto Sax., Tenor Sax., Baritone Sax., Trumpet in B $\flat$ , Euphonium, and Tuba. The score is written in 4/4 time with a key signature of one flat. The melody is written in a single staff for each instrument, but it is a three-octave unison. To the right of the score, there are callouts in circles and rectangles indicating the octave for each instrument. The callouts are: Flute (赤), Oboe (黄), Clarinet in B $\flat$  (赤), Bass Clarinet (黄), Alto Sax. (黄), Tenor Sax. (緑), Baritone Sax. (黄), Trumpet in B $\flat$  (黄), Euphonium (緑), and Tuba (黄). The callouts for Flute, Clarinet in B $\flat$ , and Trumpet in B $\flat$  are in red circles. The callouts for Oboe, Alto Sax., Baritone Sax., and Tuba are in yellow circles. The callouts for Bass Clarinet, Tenor Sax., and Euphonium are in green rectangles.

## 譜例 2

3. 赤のグループ  
(Fl, Cl)

2. 黄のグループ  
(Ob, Asx, Tp)

1. 緑のグループ  
(Tsx, Euph)



### 3 実践の成果

本校吹奏楽部の合奏では、このようにユニゾンを音域ごとに分割し、各音域毎に集合させ、丁寧に音程を合わせていく。生徒達は合奏中に席を離れて移動するので、合奏活動のマナー防止にもなっており、演奏の度にグループ内で意見交換をさせることで、互いへの刺激にもなっている。ユニゾンを整理し音域別に旋律を分割して練習するようになってから、サウンドが鮮明になり飛躍的に合奏の力が向上したと感じている。何より、生徒達から「音域毎に分割して練習をした方が音程を合わせやすい」「音色に一体感が増して合奏が楽しくなった」という声を聴くようになった。



本校での「オクターブ・ユニゾン」を取り入れた合奏風景

### 4 普及させたい取組と期待される効果

この練習方法は、移調楽器の度数を把握しスコアの各声部を色分けして生徒にグループ練習させるという極めてシンプルなものなので、総譜（スコア）を読むことが苦手な指導者であっても、直ぐに実践できるものである。吹奏楽では多くの種類の楽器を扱っているが、どんなに大きな編成であったとしても合奏における声部は4声部程であり、教員がグループ分けを示し、各グループで練習させれば生徒達は体感的に音を合わせていくことができるのである。

### 5 課題及び今後の取組の方向

吹奏楽はクラシック、ジャズ、ポップス、ラテン、ボサノバ、演歌等、多くのジャンルの音楽を演奏できる無限の可能性を秘めた音楽形態である。今後は、生徒達が諸活動を通して成長を実感し向上する喜びを味わえるよう、より効率的、能率的な練習法を探究していきたいと考えている。